研　究

小児がんおよび小児がん経験者への児童生徒の認識と態度

副島　尭史[1)]，東樹　京子[1)]，佐藤　伊織[1)]
武田　鉄郎[2)]，上別府圭子[1)]

〔論文要旨〕

小児がんや小児がん経験者に対する児童生徒の認識と態度を明らかにするため，小中学生1,232名を対象に質問紙調査を行った。内容はがん／小児がんの認知，経験者との接触経験，小児がんへの関心度，小児がんの知識，経験者へのイメージ，経験者への態度とした。有効回答数は880名，小児がんについて知っている者は510名であった。この510名中14名のみ直接接触があり，ほとんどが間接接触であった。多くの児童生徒が小児がんに関心はあったが，小児がんの予後に関する理解は少なかった。経験者に対して調和的・活動的・共感的なイメージを示し，態度は好意的であった。児童生徒に対して小児がんに関する全般的な知識を普及する必要性が明らかになった。

Key words：小児がん経験者，児童生徒，知識，イメージ，態度

Ⅰ．序　　論

日本における小児がんの罹患率は100万人あたり133.4人である[1)]。近年，化学療法を中心とした治療の進歩・普及によって5年生存率が68.2%に上昇し[2)]，多くの小児がん経験者（以下，経験者）が地元の学校に復学していると考えられる。しかし復学後の経験者は他の小児慢性疾患児や健常児に比べ，通院による授業の欠席[3)]，身体機能の制限[4)]，学習の遅れ[5)]等，疾患や治療の副作用，長期入院に起因した学校生活上の問題に直面する傾向にある。また友人関係，クラスへの適応も経験者が直面する問題の1つであり，健常児に比べクラスメートからいじめの対象となりやすく，友人をつくることや友人との信頼関係を構築することが難しいとされる[5,6)]。一方，学校生活上の問題の解決や学校生活の継続という点においてクラスメートの役割は大きい[7)]。このように経験者のクラスへの円滑な適応や良好な友人関係の構築には，経験者に対するクラスメートの役割が重要になると考えられる。

経験者と同様に，友人関係やクラスへの適応が問題となる児童生徒として障害児が挙げられる。先行研究では障害児（者）におけるこの問題を解消するうえで，障害児（者）に対する好意的な態度に注目し，「年齢（学年）」，「性別」，「接触経験の内容」，「障害児（者）についての知識」，「障害児（者）に対する関心度」，「障害児（者）に対する好意的なイメージ」，「障害児（者）に対する態度」を調査していた[8,9)]。

経験者の復学支援に関する先行研究では，経験者と一緒に学校生活を送る可能性のある一般の児童生徒を対象とした研究[10)]は非常に少なく，またその児童生徒が日常生活の中で得ることのできる小児がんに関する知識やイメージ，態度の実態は明らかになっていない。

Evaluation of Elementary and Junior High School Students' Understanding of and Attitudes toward Childhood Cancer and the Survivors　〔2363〕
受付 11. 9. 6
採用 12. 8.14
Takafumi SOEJIMA, Kyoko TOJU, Iori SATO, Tetsuro TAKEDA, Kiyoko KAMIBEPPU
1）東京大学大学院医学系研究科健康科学・看護学専攻家族看護学分野（看護師／研究職）
2）和歌山大学大学院教育学研究科（教諭／研究職）
別刷請求先：副島尭史　東京大学大学院医学系研究科健康科学・看護学専攻家族看護学分野
〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1 医学部5号館206
Tel/Fax：03-5841-3399

Presented by Medical*Online

本研究の目的は経験者のクラスメートとなり得る一般の児童生徒を対象とし，小児がんや経験者に関する知識や関心，イメージ，経験者への態度の実態を明らかにすることである。

Ⅱ．方　　法

1．調査期間／対象

2008年12月，A県の小中学校3校に在籍している小学3年生～中学3年生までの全児童生徒のうち，質問紙配布日に出席していた1,232名。

2．調査方法

無記名自記式質問紙調査を実施した。学校長の承諾後，各担任教諭向け説明書により担任教諭に対して研究の概要を説明した。各担任教諭より児童生徒に研究説明を行い，質問紙および保護者／本人向け説明書を配布した。保護者と本人の同意の下，自宅にて回答した。質問紙は各担任教諭を通じて，配布後1週間程度で回収した。

3．質問紙内容

質問紙は，大きく分けて，『基本属性』，『小児がんに対する認識』，『経験者への態度』から構成した。さらに『小児がんに対する認識』は「がん／小児がんの認知」，「経験者との接触経験」，「小児がんへの関心度」，「小児がんの知識」，「経験者へのイメージ」に関する質問項目を設定した。

i．基本属性

学年，性別について回答を求めた。

ii．がん／小児がんの認知

それぞれ“がんという病気を聞いたことがありますか”，“あなたと同じくらいの子どもががんにかかることを聞いたことがありますか”に対して“はい”，“いいえ”で回答を求めた。

iii．経験者との接触経験

経験者との接触経験は，経験者との身近な接触を示す直接接触と，テレビや家族・友人から経験者について見聞きしたことを示す間接接触に区別した。直接経験は“がんを乗り越えた子どもに会ったことはありますか”という質問に対して，“会ったことがない”，“同じクラスではないが，会ったことがある”，“同じクラスメートとして会ったことがある”で回答を求めた。間接接触は“がんを乗り越えた子どもについてお母さんやお父さん，友だちから聞いたことがありますか”に対して“はい”，“いいえ”で回答を求めた項目と，“がんを乗り越えた子どもについてテレビや本，新聞から見たり聞いたりしたことがありますか”に対して“見たり聞いたりしたことはない”，“テレビ”，“新聞”，“本・マンガ”，“学校の授業”，“その他（自由記載）”で複数回答を求めた項目を設定した。

iv．小児がんへの関心度

“小児がんやがんを乗り越えた子どもについて聞いたり，がんを乗り越えた子どもと話したりしたいと思いますか”という質問に対して“とてもそう思う（＝関心あり）”，“少しそう思う（＝少し関心あり）”，“あまりそう思わない（＝あまり関心なし）”，“全然そう思わない（＝関心なし）”の4件法で回答を求めた。

v．小児がんの知識

質問項目の内容は小児がんに関する子ども向けの書籍[11]および小児がんに関する専門書[12]を参考に，小児がんの復学支援に携わる共同研究者間で意見交換し決定した。質問項目は＜小児がんの予後＞，＜小児がんへの感染＞，＜治療の副作用による容姿の変化＞，＜長期入院＞等，全12項目とした。各項目に対して“とてもそう思う”，“少しそう思う”，“あまりそう思わない”，“全然そう思わない”の4件法で回答を求めた。

vi．経験者へのイメージ

SD法は人物や色彩，音楽等の広い範囲にわたって人が抱く意味あるいはイメージを測定する方法である[13]。本研究では小学6年生を対象としたSD法に関する研究[14]を参考に，共同研究者間で経験者のイメージを測定できるよう適切な形容詞を抽出後，対義語を選定した。1～6点の6件法で17項目を設定し，得点が高いほど好意的なイメージを抱いているとした。

vii．経験者への態度

Chedoke-McMaster Attitudes Toward Children with Handicaps（CATCH）scaleは障害児に対する好意的な態度を促進させる介入評価のために開発され，9～13歳を対象とした自記式尺度である[15]。全28項目あり，障害児への肯定的態度を尋ねる項目と否定的態度を尋ねる項目を各14項目含む。本研究ではこのCATCH scaleを原著者に承諾を得たうえで，経験者への態度が測定できるよう文言の修正を行い，2名による順翻訳および英語を母国語とした翻訳者による逆翻訳を経て，日本語版経験者への児童生徒の態度調査票 Pupils' Attitudes Toward Children with Cancer

Presented by Medical*Online

(PATCC) scale とし使用した。PATCC scale も原版と同様に肯定的／否定的態度を測定する項目を各14項目ずつ設定した。一般の児童生徒は経験者との身近な接触が少なく，経験者を想像しにくいと予想されるため，本研究では原版の5件法から変更し4件法とした。

4．倫理的配慮

調査の実施により児童生徒が不利益を被る可能性を考慮し，小児がん患児／経験者が現在在籍していない小中学校を選定した。各担任教諭向け／保護者向け／児童生徒向け説明書をそれぞれ用意し，各説明書中に調査への参加は自由意志によるものであり，不参加によりいかなる不利益も生じない旨を記載した。調査への参加は，児童生徒と保護者の同意を必要とし，質問紙への回答をもって同意とみなした。保護者・担任教諭が児童生徒の質問紙への回答を強制しないよう説明文書に明記した。また，調査への参加・不参加や回答内容を，担任や他の児童生徒に知られることがないよう，あらかじめ配布した封筒に厳封して回収した。調査の性質上，質問紙で尋ねた内容について正しい知識を普及するため，調査終了後，児童生徒にリーフレットを配布した。また本研究は東京大学大学院医学系研究科倫理審査委員会の承認を得て行った。

5．解　析

『小児がんに対する認識』のうち，「がん／小児がんの認知」，「経験者との接触経験」，「小児がんへの関心度」，「小児がんの知識」と『経験者への態度』は，各回答における児童生徒の人数とその割合を算出した。「経験者へのイメージ」について，SD 法を使用した研究の多くが因子分析によりイメージの構成について検討していたため[13]，本研究においても因子分析を行い，また各項目での記述統計量を算出した。解析には SPSS12.0J for Windows を使用した。

Ⅲ．結　　果

1．基本属性

全体で880名の有効回答を得た（有効回答率71.3％）。概要は小学生が543名（61.7％），中学生が337名（38.3％）であった。性別では男子が408名（46.4％），女子が460名（52.3％），不明が12名（1.3％）であった。

2．小児がんに対する認識（表1）

i．がんの認知，小児がんの認知

がんについて聞いたことがあると回答した者は845名（96.0％）であったが，小児がんについて聞いたことがあると回答した者は510名（58.0％）と差が見られた。以降この510名について解析を行った。この510名の概要は，小学生が268名（52.5％），中学生が242名（47.5％）であった。性別では男子が218名（42.7％），女子が286名（56.1％），不明が6名（1.2％）であった。

ii．経験者との接触経験

直接接触のある者は14名（2.8％）であり，ほとんどの児童生徒は経験者との身近な接触はなかった。間接接触のある者のうち，“テレビ”が447名（87.6％）と最も多く，“家族･友人”が104名（20.4％），“授業”が50名（9.8％）であった。

iii．小児がんへの関心度

“とてもそう思う”，“少しそう思う”と回答した者はそれぞれ87名（17.1％），268名（52.5％）であり，合わせて約70％の児童生徒は関心があると回答した。

iv．小児がんの知識

＜入院中の体験＞，＜長期入院＞について“とてもそう思う”と回答した者は多かったが，＜小児がんの予後＞，＜易感染性＞についてはそれぞれ41名（8.0％），125名（24.5％）と少なかった（表2）。本研究における Cronbach's α は0.746であった。

v．経験者へのイメージ

主因子法，プロマックス回転による因子分析を行った。各因子における因子負荷量が全て .350以下あるいは2つ以上の因子に因子負荷量が .350以上あった3項目を除外した。＜調和的なイメージ＞，＜活動的なイメージ＞，＜共感的なイメージ＞の3因子が抽出された。3因子の累積寄与率は49.6％であった。イメージ全体および各因子における Cronbach's α は，それぞれ0.854，0.848，0.818，0.647であった。各項目における平均得点は“活発な―大人しい”において3.75点と他項目に比べ低かったが，概ね4.0～5.0点台であり，対象者全体として経験者に対する調和的，活動的，共感的なイメージを持っていることが示された（表3）。

3．経験者への態度

肯定的態度について，“学校行事に参加する”や“隣の席に座る”など学校生活における項目や“からかわれていたら助ける”の項目で“とてもそう思う”を選

Presented by Medical*Online

表1　小児がんに対する認識

		小学生(n=543) 人	%*	中学生(n=337) 人	%*	全体(n=880) 人	%*
がんの認知							
	はい	522	96.1	323	95.8	845	96.0
	いいえ	14	2.6	4	1.2	18	2.0
	無回答	7	1.3	10	3.0	17	1.9
小児がんの認知							
	はい	268	49.4	242	71.8	510	58.0
	いいえ	264	48.6	85	25.2	349	39.7
	無回答	11	2.0	10	3.0	21	2.4
		小学生（n=268） 人	%**	中学生（n=242） 人	%**	全体（n=510） 人	%**
経験者との接触経験							
直接接触	同じクラスの友だちとして会ったことがある	3	1.1	1	0.4	4	0.8
	同じクラスの友だちではないが，会ったことがある	3	1.1	7	2.9	10	2.0
	会ったことはない	261	97.4	234	96.7	495	97.1
	無回答	1	0.4	0	0.0	1	0.2
間接接触	家族・友人	72	26.9	32	13.2	104	20.4
	テレビ	236	88.1	211	87.2	447	87.6
	新聞	41	15.3	57	23.6	98	19.2
	本やマンガ	37	13.8	43	17.8	80	15.7
	授業	25	9.3	25	10.3	50	9.8
小児がんへの関心							
	関心あり	53	19.8	34	14.0	87	17.1
	少し関心あり	145	54.1	123	50.8	268	52.5
	あまり関心なし	49	18.3	56	23.1	105	20.6
	関心なし	14	5.2	15	6.2	29	5.7
	無回答	7	2.6	14	5.8	21	4.1

*：小学生はn=543，中学生はn=337，全体はn=880のうちの割合

**：小学生はn=268，中学生はn=242，全体はn=510のうちの割合

択した者は242～199名（47.5～39.0%）と他項目に比べ特に多かった。一方“泊まりに来るように誘う”，“秘密を話す”といった項目で“とてもそう思う”を選択した者はそれぞれ58名（11.4%），57名（11.2%）と少なかった。また否定的態度について，“近くにいるのは恐ろしい”，“怖いと思う”等，経験者への恐怖心に関する項目で“全然そう思わない”を選ぶものは約60%と他項目に比べ特に多かったが，“かわいそうだと思う”の項目では152名（29.8%）が“とてもそう思う”を選択しており，“全然そう思わない”を選択した者は55名（10.8%）であった（表4）。本研究におけるCronbach's αは0.884であった。

Ⅳ．考　　察

1．経験者との接触経験

直接接触のある者はほとんどいなかったが，小児がん患児／経験者が現在在籍していない小中学校を選定したため，この結果には大きなバイアスがあると考えられる。「経験者との接触経験」の結果から，小児がんについて見聞きする情報源はほぼテレビであった。

Presented by Medical*Online

表2 小児がんの知識

n=510

	とてもそう思う		少しそう思う		あまりそう思わない		全然そう思わない		無回答	
	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%
入院中の体験	410	80.4	53	10.4	8	1.6	3	0.6	36	7.1
長期入院	392	76.9	71	13.9	8	1.6	3	0.6	36	7.1
小児がんへの感染	323	63.3	103	20.2	29	5.7	18	3.5	37	7.3
入院中のクラスメートとの交流	298	58.4	145	28.4	21	4.1	8	1.6	38	7.5
治療の副作用による容姿の変化	296	58.0	143	28.0	21	4.1	12	2.4	38	7.5
学習の遅れ	265	52.0	152	29.8	37	7.3	18	3.5	38	7.5
授業の欠席	245	48.0	199	39.0	18	3.5	11	2.2	37	7.3
通学の困難	222	43.5	178	34.9	59	11.6	13	2.5	38	7.5
体力の低下	211	41.4	170	33.3	73	14.3	20	3.9	36	7.1
院内学級	172	33.7	183	35.9	87	17.1	30	5.9	38	7.5
易感染性	125	24.5	187	36.7	124	24.3	38	7.5	36	7.1
小児がんの予後	41	8.0	168	32.9	220	43.1	43	8.4	38	7.5

表3 経験者へのイメージ

n=510

		平均± SD*	因子負荷量		
調和的なイメージ	優しい—怖い	5.11±0.09	*0.806*	−0.010	−0.019
	性格の良い—性格の悪い	4.76±0.10	*0.777*	−0.027	−0.009
	親切な—意地悪な	4.98±0.09	*0.754*	0.064	−0.062
	正直な—嘘付きな	4.84±0.09	*0.708*	−0.118	0.130
	思いやりのある—わがままな	4.98±0.10	*0.695*	0.032	0.076
	落ち着いた—落ち着きのない	4.51±0.10	*0.450*	0.028	0.110
活動的なイメージ	たくましい—弱々しい	4.63±0.12	−0.169	*0.828*	0.089
	強気な—弱気な	4.19±0.13	−0.121	*0.725*	0.084
	明るい—暗い	4.50±0.11	0.162	*0.702*	−0.180
	元気な—元気のない	4.36±0.12	0.184	*0.670*	−0.108
	活発な—大人しい	3.75±0.13	−0.057	*0.662*	0.027
	しっかりした—頼りない	4.86±0.10	0.206	*0.525*	0.081
共感的なイメージ	我慢強い—我慢強くない	5.24±0.10	0.000	0.074	*0.792*
	大変そうな—苦労のない	5.11±0.10	0.099	−0.070	*0.566*

*：点数が高いほど左側の形容詞のイメージが強い。SD は標準偏差

小児慢性疾患児についての情報源を調査した研究においても[16]，テレビや新聞などのメディアが情報源の上位にあり，児童生徒に対するメディアの影響は大きいと考えられる。また，本研究において，医療関係者からの情報提供に関する選択肢は設定していなかったが，自由記載にて医療関係者から情報を得たという記述はなかった。先行研究でも医療関係者から情報を得ている者は少なかった[16]。児童生徒はメディアを通じ

Presented by Medical*Online

表4　PATCC scale

n=510

肯定的態度	とても そう思う		少し そう思う		あまり そう思わない		全然 そう思わない		無回答	
	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%
その子と一緒に学校の行事が出来たらと思う	242	47.5	183	35.9	52	10.2	11	2.2	22	4.3
教室でその子が隣に座っても気にならないだろう	227	44.5	174	34.1	64	12.5	30	5.9	15	2.9
その子がからかわれていたら助けるだろう	199	39.0	219	42.9	58	11.4	14	2.7	20	3.9
その子が家に誘ってくれたらうれしいだろう	198	38.8	204	40.0	68	13.3	14	2.7	26	5.1
今まで知らなかった子でもその子に話しかけるだろう	151	29.6	216	42.4	107	21.0	15	2.9	21	4.1
その子は何かをするときにたくさんの手助けが必要だ	137	26.9	152	29.8	153	30.0	44	8.6	24	4.7
その子と一緒にいて楽しいだろう	132	25.9	234	45.9	97	19.0	13	2.5	34	6.7
その子も自分と同じくらい幸せだ	128	25.1	154	30.2	161	31.6	50	9.8	17	3.3
その子を自分の誕生会に誘うだろう	122	23.9	197	38.6	119	23.3	38	7.5	34	6.7
その子は大人からいろいろ手助けしてほしいと思っている	114	22.4	155	30.4	181	35.5	39	7.6	21	4.1
その子が親友だったらうれしいだろう	84	16.5	195	38.2	181	35.5	27	5.3	23	4.5
自分の家に泊まりに来るようにその子を誘うだろう	58	11.4	132	25.9	217	42.5	65	12.7	38	7.5
自分の秘密をその子に話すだろう	57	11.2	136	26.7	177	34.7	101	19.8	39	7.6
隣の家にその子が住んでいたらいいのにと思う	46	9.0	128	25.1	264	51.8	46	9.0	26	5.1

否定的態度	とても そう思う		少し そう思う		あまり そう思わない		全然 そう思わない		無回答	
	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%
その子はかわいそうだと思う	152	29.8	169	33.1	117	22.9	55	10.8	17	3.3
その子と何を話してよいかわからないだろう	71	13.9	165	32.4	150	29.4	109	21.4	15	2.9
その子は自分自身をかわいそうだと思う	57	11.2	123	24.1	198	38.8	111	21.8	21	4.1
その子はよく悲しそうにしている	35	6.9	116	22.7	226	44.3	98	19.2	35	6.9
その子はあまり楽しいことがなさそうである	31	6.1	110	21.6	212	41.6	132	25.9	25	4.9
その子を友だちに紹介しないだろう	30	5.9	67	13.1	206	40.4	189	37.1	18	3.5
その子を他の友だちほど好きではないだろう	29	5.7	116	22.7	239	46.9	99	19.4	27	5.3
その子とずっと一緒にいて，休み時間がなくなってしまうのはもったいないだろう	22	4.3	64	12.5	214	42.0	184	36.1	26	5.1
その子を見るとおろおろしてしまう	17	3.3	67	13.1	199	39.0	200	39.2	27	5.3
その子の家に遊びに行かないだろう	13	2.5	61	12.0	205	40.2	204	40.0	27	5.3
その子から離れていようとするだろう	10	2.0	63	12.4	221	43.3	198	38.8	18	3.5
その子から誕生会に誘われたら困るだろう	7	1.4	48	9.4	164	32.2	267	52.4	24	4.7
その子を怖いと思うだろう	6	1.2	44	8.6	146	28.6	300	58.8	14	2.7
そういう子が近くにいるのは恐ろしい	4	0.8	23	4.5	146	28.6	315	61.8	22	4.3

て小児がんについての情報に触れることが多く，医療関係者から直接情報を得ていることが少ない現状がある。医療関係者がメディアを通じて小児がんや経験者について適切に伝えることは，児童生徒に小児がんを知ってもらう有効な手段の1つと考えられる。

2．小児がんの知識

＜小児がんの予後＞，＜易感染性＞は他項目に比べ“とてもそう思う”と回答した者が少なかった。経験者は担任教諭からクラスで“死ぬかもしれない病気だ”と話されたり，友人に“白血病って死ぬんだぞ”と

Presented by Medical*Online

大声で言われたりする等[17]，担任教諭やクラスメートが“小児がん＝死”のように連想することを嫌なこととして感じている。担任教諭や児童生徒に対し小児がんの予後に関する正しい知識を啓発することが重要である。<易感染性>について，大見らによると，教員に小児がんの症状や治療の副作用について回答を求めたところ，<易感染性>の回答は少なかった[18]。教員でさえ<易感染性>について知っている者が少ないため，治療の副作用の中でも外見の変化として認識されやすい<容姿の変化>や<長期入院>等に比べ，<易感染性>をよく知っている児童生徒は少なかったと考えられる。

3．経験者へのイメージ

児童生徒が経験者に抱くイメージは，調和的・活動的・共感的なイメージの3つがみられた。入院中の経験や長期入院，副作用による容姿の変化等の知識が“苦労”，“大変な”といったイメージに結びついているのだと考えられる。また小児がんの予後がよくないという誤った知識が影響している可能性もある。視覚障害をもつ児童に対する先行研究において，“親切な”，“性格の良い”といった形容詞で構成されるイメージと“明るい”，“元気な”といった形容詞で構成されたイメージが抽出された[14]。本研究で使用した形容詞は先行研究と異なる部分もあるが，先行研究と同様の形容詞をイメージしていることや因子構造の類似があることから，障害児と経験者では児童生徒が抱くイメージの構造は似ていると考えられる。

4．経験者への態度

経験者への態度は概ね好意的な結果であった。“泊まりに来るように誘う”，“秘密を話す”の項目では“とてもそう思う”と回答した児童生徒は少なかったが，親密な間柄でないと難しいためであると考えられる。また“その子がからかわれていたら助けるだろう”の項目において“とてもそう思う”，“少しそう思う”が合わせて約80％という結果であった一方，“あまりそう思わない”，“全然そう思わない”が合わせて約14％であったことから，必ずしも経験者に対して好意的な態度を取るとは言えない。実際の復学の場面では，経験者・児童生徒の個人的な特性に注意し，経験者との関係を見守ることが必要である。

5．経験者の復学支援への示唆

本研究の結果から小児がんの予後等小児がんや経験者に関する知識を十分に持っている児童生徒は少なかった。小児がんの生存率の上昇はここ30年のことであり，小児がんの知識は児童生徒を含めた一般社会に必ずしも広まっていない。まず小児がんや経験者に関する全般的な知識の普及が，小児がんや経験者に対する理解を深める機会になると考えられる。小中学校における保健体育では小児がんに触れることはほとんどなく，一般の児童生徒に正しい知識を普及することは難しい。小中学生の学校教育で小児がんや経験者について取り上げることが望まれる。また経験者が復学する際には，経験者や家族と話し合いのうえ，経験者に関する情報をクラスメートに提供し[19]，クラスメートの発達に応じて説明内容を考慮する必要があるとされている[10]。小児がんに関する知識の普及と共に，経験者に関する情報提供を含め，経験者や家族のニーズに個別的に対応すべきである。

V．本研究の限界・課題

1．結果の一般化

本研究の対象者において実際に経験者と身近に接触したことのある児童生徒はほとんどいなかった。また小児がんや経験者に対するイメージや態度を測定する目的上，小児がんを知っている児童生徒のデータを解析した。そのため本研究の結果は，経験者と身近に接したことのない，小児がんを知っている児童生徒に限定される。

2．PATCC scale

現在のところ，一般の児童生徒の経験者に対する態度を評価する尺度は見受けられない。本研究で使用したPATCC scaleは内容的妥当性・内的一貫性が保証されるものの，障害児への態度評価のために開発された尺度を基にしている。今後，経験者・児童生徒へのインタビュー等を通して，より経験者への態度に特化した尺度への洗練が必要だと考えられる。

3．関連要因の検討

本研究では児童生徒の回答に偏りがみられたため，態度に対する関連要因の検討は行わなかった。大見らは疾患や治療の副作用について児童生徒に説明を行った方が経験者に対する否定的反応が少なくなると述べ

Presented by Medical*Online

ている[10]。小児がんの知識や小児がんに対する好意的なイメージを有する児童生徒は経験者への態度も好意的なものになると考えられ，今後関連要因の検討が必要である。

Ⅵ．結　　論

小児がんや経験者に対する一般児童生徒の認識と態度の実態を明らかにした。経験者に対するイメージ，態度は好意的なものであったが，小児がんの予後，易感染性についてよく知られていなかった。児童生徒に対して小児がんに関する全般的な知識の普及を行うことが必要である。ただし経験者の実際の復学支援において，経験者やその家族のニーズに個別的に配慮することが必須である。

謝　辞

本研究にご協力いただきました児童生徒と学校関係者の皆様に厚くお礼申し上げます。本研究は，平成20年度厚生労働科学研究費補助金　がん臨床研究事業（課題番号 H20―がん臨床――一般―001；主任研究者 真部　淳）による研究助成を受け，第7回日本小児がん看護学会（復学支援）にて発表しました。

文　　献

1) 恒松由記子，伊藤千賀子，味木和貴子．わが国の小児がんの疫学的動向．小児科診療　1999；62；1129-1136.
2) Ajiki W, Tsukuma H, Oshima A. Survival rates of childhood cancer patients in Osaka, Japan. Japanese Journal of Clinical Oncology　2004；34；50-54.
3) Charton A, Larcombe IJ, Meller ST, et al. Absence from school related to cancer and other chronic conditions. Archives of Disease in Childhood 1991；66；1217-1222.
4) Punyko JA, Gurney JG, Scott Baker K, et al. Physical impairment and social adaptationin adult survivors of childhood and adolescent rhabdomyosarcoma：A report from the Childhood Cancer Survivors Study. Psyco-Oncology　2007；16；26-37.
5) Barrera M, Shaw AK, Speechly KN, et al. Educational and social late effects of childhood cancer and related clinical, personal, and familial characteristic. Cancer　2005；104；1751-1760.
6) Lähteenmäki PM, Huostlia J, Hinkka S, et al. Childhood cancer patients at school. European Journal of Cancer　2002；38；1227-1240.
7) Lighthood J, Wright S, Sloper P. Supporting pupils in mainstream school with an illness or disability：young people's view. Child：Care, Health & Development　1999；25；267-283.
8) 河内清彦．障害者との接触経験の質と障害学生との交流に対する健常学生の抵抗感との関連について．教育心理学研究　2006；54；509-521.
9) 豊村和真，佐藤真衣子．障害者に対する態度に関する横断的研究（1）．北見論集（社）　2008；45；77-86.
10) 大見サキエ．がんの子どもが復学する時のクラスメートへの説明　小学校における場面想定法を用いた検討．小児がん看護　2010；5；35-42.
11) Baker LS，細谷亮太訳．君と白血病：この1日を貴重な1日に．第1版．東京：医学書院，1982.
12) 別所文雄，横森欣司．よく理解できる子どものがん．第1版．大阪：永井書店，2006.
13) 井上正明，小林利宜．日本におけるSD法による研究分野とその形容詞対尺度構成の概観．教育心理学研究　1985；33；253-260.
14) 河内清彦．視覚障害のある児童とない児童に対する小学6年生のイメージの意味構造．特殊教育学研究 1996；34；63-71.
15) Rosenbaum PL, Armstrong RW, King SM. Children's attitudes toward disabled peers：a self-report measure. Journal of Pediatric Psychology　1986；11；517-530.
16) Brook U, Galili A. Knowledge and attitudes of high school pupils towards children with special health care needs：an Israeli exploration. Patient Education & Counseling　2000；40；5-10.
17) がんの子どもを守る会 Fellow Tomorrow，病気の子どもの気持ち―小児がん経験者のアンケートから―．東京：がんの子どもを守る会 Fellow Tomorrow 編集委員会，2001.
18) 大見サキエ，須場今朝子，高橋佐智子，他．がんの子どもの教育支援に関する小学校教員の認識―A市における全校調査―．小児保健研究　2007；66；307-314.
19) 平賀健太郎．小児がん患児の前籍校への復学に関す

Presented by Medical*Online

る現状と課題―保護者への質問紙調査の結果より―. 小児保健研究 2007；66；456-464.

〔Summary〕

Purpose：This study investigated elementary and junior high school students' understanding of and attitudes toward childhood cancer and the survivors (CCSs), which might affect CCSs' establishment of relationships with friends and adjustment to school.

Method：A self-report questionnaire was distributed to 1,232 students at three elementary and junior high schools. The questionnaire included items about recognition of cancer/childhood cancer, contact with CCSs, interest in childhood cancer, knowledge about childhood cancer, image of CCSs, and attitudes toward CCSs.

Results：Responses were received from 880 students, 510 of whom recognized childhood cancer. Almost all respondents indicated they had experienced indirect contact with CCSs；however, only 14 students reported having had direct contact. Many students were interested in childhood cancer. In terms of knowledge about childhood cancer, students' understanding of "prognosis of childhood cancer" was the lowest. Students' images of CCSs were active, sympathetic and represented harmony between the CCSs and students. Therefore, we assume that their images of CCSs would become more favorable if they had direct contact.

Conclusion：The present findings demonstrate the need to spread knowledge about childhood cancer among students.

〔Key words〕
knowledge, image, attitude, students

Presented by Medical*Online